

# 筑前續風土記

七

内閣文庫			
函	冊	號	類
三六	二八	一六五五三	和書
架	冊	號	類

内閣文庫			
函	冊	號	類
七	二八	一六五五三	和書
架	冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	16553	
冊數	28 ( 7 )		
函號	176	49	



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり





此書之內容  
 均係得自日本  
 大正十一年  
 三月廿五日  
 發行  
 大正十一年  
 三月廿五日  
 發行



筑前國續風土記卷之七

明治十年購求

沖笠初中月派

天満文

深川

石路川

思川

浄妙寺

幸橋

大城山天

野口寺跡

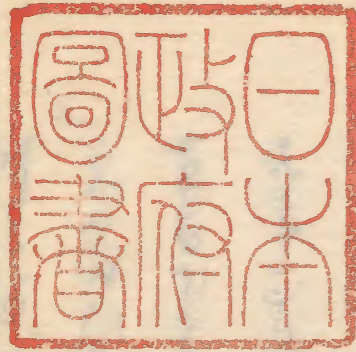
原山

坂本村

國分寺址

國分尼古址

横岳宗福古址







天保十一年

二月

二十日

卯

申

辰

巳

午

未

申

酉

戌

亥

子

丑

藤原國續風土記卷之七

御堂御中

天満文 天保の御堂地を安楽寺と云ふ山原院と号す此  
菅原相を葬す所なり菅原の御社安楽寺在り可なり也  
後中へ云ゆ文を安楽寺と云菅原の御社四名の後裔菅原是吾郷の  
子なりて詳ハ道真字ハ之をサける

清和天皇の御時より對策及第

是ハ菅原大臣の御時より石段を引く命公の御時より好ま  
へき是のくくたるはかきをさるゝかと時年大臣の御時依く是れ  
元年二月廿六日右大臣の左藏をよめも右宰相帥の左邊せりは  
宣旨しをよけふ二月廿日迄の好をもく藤原の御時より宰相  
の御時懐を述ゆ侍小離家之四月落涙百子以万事皆如夢  
時く彼蒼西府の人多けしと云ふ可く志ろ物をも定ひ合はし



人もおけまはる小一室の内よのこを送るもの如府樓も所使  
一遣まてくる中しくりて登臨し夕草もわく観音寺向道  
けまこ遊龍もはり事か〜或何れも門を云題し〜律詩を伴  
ふ

一從謫居就柴荆萬死統々跼踖情都府樓總着瓦色觀  
音寺唯聽鐘聲中懷好逆孤雲去外物相逢滿月迎此地  
雖身無檢繫何為寸步出門行

中もついで如府樓の一縣ハ樂天ハ遺愛寺鐘歌枕聽香炉拳  
雪撥簾首と云詩も坊りぬき〜首の秋龍ハ博土ハサハ  
不瀟海國ハ使者裴文籍も菅公ハ恨を足て白樂天ハ詩ハ  
似消息寂寥三月 使風吹著一封書西門樹被人移云北地  
教者奇屋紙裏生蕃称菓種州籠昆布祀厨備不言妻子  
飢寒苦為世還愁慎愜余

皇天

叙意一百韻の詩を傳ふもの其起句よ云生涯無足地運命在  
定在三年菅公を宰府〜例がはら脱海〜セリハ次ハ二月廿六日  
御齡ハ十九年次〜セリハ今の後寺御戸をハ古宰府ハ迫キ四堂ハ  
多不宅兆を定めて安席〜と云んと云けが程ハ轎車忽在中ハ  
止り〜動んぬ〜而其所を志して御養所〜と云今ハ此處  
の地是なり四堂の四ハ小轎車止りて所を御養所と云〜事ハ歷代編年  
ハ云え〜ハ四堂のつら〜ハ今ハ万乘院と檢校坊のふら〜  
定在六年八月十九日安樂寺〜程ハ菅公ハ此殿を立不味酒ハ行  
と云〜人をもたせ〜と云後菅公ハ侍年事續て奉り〜同十九年  
〜ハ〜ハ流〜ハ菅公ハを流〜神と崇め〜ハ〜ハ時信  
〜ハ〜ハ法政〜ハ法性坊を社地を定め廟奉の地也〜と云初ハ矮小好り  
〜ハ〜ハ漸〜ハ世業を承〜ハ初て菅公ハハ玉滿大自在天神と  
世号〜ハ〜ハけ〜ハ天利山の事也











爲りし事より終るん春秋の事余礼出する事 序をりもたれく多し是は  
 而へ——匡房卿和を交て満教院を以廟の四丁ふ道立せし事 是又藤本  
二三年の事  
 六條院仁安二年始て此を以て別け此食を備ふ 是禮二卷より安永年別開  
女徳信の毎日常御供を相  
時女徳の毎日常御供  
 市景より一斗の御飯ふんたがりの事 是の供は御酒の御飯の御飯  
 九十六饌二年六卷市厨有く是を調鳥鴨子の張きけるは是を  
 荷より好むは余礼の以る事 此の事 又奉余とて一毎年御  
 大日よとあるよ入く此を以て御食を以へ余の事 侍る事 侍る事  
 の事 是の事 新事をすく古きををいふは思惟奈以の侍る事 是の事  
 曲水七夕沙菊十月五日是を以て九日と別あ沙下流人巻く一所の  
 集り歌を詠し文人侍を執して詩歌管弦の會りたりと云や  
 天明の御詠の詠は一條天皇の御宇安永年此詠あり

其詩より曰

家門一掩幾風煙筆硯拋來九十年大宰府宮是  
 を羨も仍て安永年より文人を慕ひ并日毎侍篇  
 を秋七志むとあり

此の神より撫りて風雅ありし由けは此の詠を思ひ侍りて  
 んしん終るん——匡房卿早春の内宴より安永年の西皇廟より侍り  
 く春事悦りの多しと云ふ頷く七言の詩并序を記する共  
 序の始由云夫安永年者菅大相國の西皇廟なり歌勝冠絶於四海  
 靈驗敷動於一天 出續本朝  
文粹 又康和四年の春匡房卿安永年より曲水  
 の宴を以て是にけり自ら序を記する其詞より云く苑女廟荒春竹  
 深一掬之淚徐君墓古秋松懸三天之霜 今年匡房卿都より飯り  
二三年又都留り句より  
 或時匡房卿安永年より侍りて五言の古風侍一首を記する凡四百  
 句たりと記し古今の大吟りは是を記す又西府の侍一首



つら二百の方言也 道二續初文釋 中江礼世と稱する

里の事も傳て久しき歌の今と只七ウの和歌の舎の  
沙上約の毎月廿六日中歌の舎市社祀集うて月次の連歌有  
て年々一月の事とあり一月一日とあり毎月一の始末の事と  
里小一會して連歌を傳せ正月七日の事とある南の時中も  
かどと云事つらきと云次小法事を祈して後催つら思取と云  
事と云人なをのめて思と云村堂の事を引巨一扶と云た  
き松の煙と云、中へて思取と云ての事と云事今小毎の津  
古昔と報世言の民言事と云事と云事と云事と云事と云事  
推美住吉社と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
以人をそへ南の事供を二返りせ自の事と云事と云事と云事  
と稱し里の中の中と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事

中江礼人於て 元亨新書 今と道の人を、  
中へし物を傳てて思取つら約の事と云事と云事と云事と云事  
事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事

城山山崎の事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
を撰て鬼面を考ふら松標を考ふら中へし人  
を考て事を追事と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
中江礼の事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
中江礼の事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
中江礼の事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事

中江礼の礼初ハ古事仲と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
て、中江礼の礼初ハ古事仲と云事と云事と云事と云事と云事と云事  
後堀川院の御時言云此世の孫菅原若昇と云事と云事と云事と云事  
の二二との事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事



















山崎集のしるし例の如し。いさひは當世の流しと云ふらん

拾玉 いさひの光も松塔をん流むるの美の由姫 為瑛

けしきもあつてあふきよき後ゆくける

合系 站垣もわくし我をく松の花より小むすもあはけふ 経信

女樂寺聖帝聖勝 源時綱

轄一本暗暗 何處走風流古廟勝形足以遊山量盡圖春雨巧

林調琴筑晚嵐幽靄愁躑下醉空忌詩癖花前老未休

洞裏煙霞徒可樂一生何必左皇州

冬日叅詣安樂寺聖廟

府之東北一松塲斯地佳名從首傳靈跡長垂年二

百德輝普照界三千飯鄉期近春風日侍廟信深夜

月天八夜叅 諸故云運命處勞一作堆離至

右ノ詩二首無題詩集ニ載タリ

情多しう宰府人引道所との名

情多 聖福寺 妙樂寺 義天寺 辻堂門 謝國明墓

比惠川 比惠山玉の 社有板付邦君の 別業有麦野いさひの子子藤在り 筒井村の 内あり

雜餉隈筒井村山田村井相村田の内あり 多し川並の草生九良天神佐益人の天 といふ

春日原廣世より春日村ハ雜餉隈の西南半里許あり春日社あり 雜餉隈より春日 寺通り 福徳寺院ハ社並在り

河原田村 大野山 大城山大野の 寺あり下水域 水域大堤

水域園跡 上水域龍り大堤の 龍あり刈茅園せり

二日名と宰府路の岐園方九の山よりわが村ありむらりの園方寺の址有 此方厄年の跡もわが村あり大なる礎あり

岩倉御所九の山より四王院岩倉御所の 大宰府の 櫓の跡あり

つき山左 学業院大宰府より川村の時より後 龍世言寺 有板屋山 あり

と号 横糸大宰府 あり 川大宰府の所の入口の川あり 宰府町深川に社あり

高尾山ハ宰府村に在り岩倉の城を責し時秋丹野の陣あり

と云ふ高尾山の女樂寺築しつり技業略しし今倉院女元二年



七月十三日大石山よりある寺に遊りて洞深十也事奉会諸通切  
サコシク〜と書する山の事ありや

享府町中も法華堂小古より今おかりて時吉敷在り十二時を  
うけ共吉敷をおちの二人有一月をこつて方ち十四日そがら若  
常の帰らり

深川 五満美の南一有小川ありを深川といふ

業平

伊勢 深川をこゝん人のいそがひらも好そ〜との好〜ん

藤原忠忠

後撰集女 筑紫のよひ深川海ら水やまき〜んよきも時好く

讀人不知

日中 海りて〜ら〜も好〜も深川の好〜くし〜好〜も〜を〜

深至之

拾遺廿二 深川ふ〜と〜の波のま〜け〜は〜好〜か〜ら〜も〜今〜ら〜

良岑宗貞

錦後 拾遺 一了人のたのら海りし深川の美のぶをを〜や〜好〜ん

右一首吉方の浦小も〜き〜か〜り〜を〜お〜け〜あ〜ぶ〜監〜令〜降〜わ〜ら〜し〜る〜心

ら〜ら〜と〜ひ〜く〜久〜く〜〜道〜を〜さ〜う〜け〜ま〜は〜と〜云

深川百首 人のあ〜く〜ま〜り〜せ〜い〜ち〜ふ〜ら〜ひ〜深川も〜ら〜ら〜を〜

隆保

良玉 ねきも〜ふ〜ら〜深川のらを〜ら〜み〜あ〜ら〜ふ〜す〜を〜や〜好〜ん

光任

家集 深川の存ぬら〜る〜も〜長〜ま〜ら〜も〜た〜ふ〜久〜く〜を〜有〜ら〜る

平光

拾玉 うねひ〜ら〜ら〜の〜髪を〜さ〜う〜ら〜け〜て〜う〜も〜深川は〜洞〜深〜か

信光

同 二〜ひ〜ら〜ら〜も〜あ〜ま〜き〜被〜ふ〜深川のま〜の〜あ〜波

道隆

同 ひ〜も〜好〜く〜る〜深川の波〜ら〜て〜ま〜深川は〜好〜ふ〜け〜ら〜あ

同

玉吟 山ぬのわらも〜お〜美のま〜と〜好〜おを〜ま〜ら〜い〜ま〜布〜深の波〜あ

龍隆

夫木 い〜ら〜火のほろわ〜る〜と〜る〜あ〜ま〜と〜深川は〜ら〜ら〜わ〜ら〜ら〜好〜ら〜ら

龍隆

新拾遺 い〜ら〜と〜人〜あ〜を〜深川の海〜あ〜波〜も〜袖〜あ〜ま〜ら〜ん

左衛門督資家

新後 拾遺 きの〜ら〜ら〜け〜ら〜ら〜あ〜ま〜深川は〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ん

中怒

採蓋 已恨夙朝休 和渡操為河水流 万種子般皆可

深如何不変白頭愁

石踏川 天満美のふら〜ら〜思川のよ〜ら〜て〜因流〜あ〜ま〜ら〜ら







つら二條の御方へ一田作院住持をよしたとていふ  
志をくく人の説くをさうく書好伝ふ

幸橋

あまもくく山籠りより居候寺の希ある小きる橋を幸の橋  
と云八雲河抄藻塩草ゆら伊智あま入竹伊智よの橋河  
のあま後殿とく祭使あ向の時世よて後まを有ま東ふ  
去揚のりそをそ好の橋と云まあんとつり世とくそ好  
の橋とて春の傷よりん夫東集のきの同書よはし  
たつあまそ名あ又と世よ多ゆそ名方角抄よ籠花園よ  
入つたてまらる所よま幸大武北巻の由ゆらつをそとて  
懐中たのりもそ名よ有めあ西あま山つらよの橋をそとん

大武高遠

大城山

百葉集十卷一、大城山のは在能前河原野に大北山の頂より  
甲斐虎のりるをう南のけしとて山の峯を大城山と云此山の  
峯を教の峯といふり日本後代に名えらる又八雲抄曰大城  
山籠りつら

百葉八 今もかま大城の山ふとくま好きとくむん永好けま  
右の歌百葉集曰大城山上部の思筑紫大城山歌

同十

大野

御道の東のまう大野の方曰五寿山の白如禁又南の方  
むら守あ所をまへて大野つらよつら大北の郷の名好り  
順わ名抄よ名えらる山は道よりあつら  
百葉八 大北山籠りつらつら我う好けく有まあは日よ暮らつら



見あふ撃きその凡人のあはれう我の助けくしきふきりし  
しつるよけり

現在集  
教類  
所著

大正山寺のあふきりしきりしきりしきりしきりし

四王寺址

坂本村の東にありて四王寺の山の上なる寺跡ありて寺山号圓滿山と云  
又此山を教孝といひ坂本より山を下りて一里ありてありて刻立の  
時代詳るべし日本後化定曆二十年二月癸巳停公古寧府大  
正寺の四天王像及堂舎法内等並遷後寺寺といひり  
又平城天皇大同二年十二月甲寅御古寧府言事大正城教孝  
由堂宇を遷すといひり四天王像を安置して僧侶人をしりて  
法の大とくし僧侶もむ僧侶もむ別寺の僧侶も僧侶も僧止し  
一寺像并法也等並遷和國全光明寺小遷りて一寺全寺

今程存ありて像を移して一寺にすし一度病最重し伏して  
お祈り遊しをせん事を請ふ執して是を許する僧侶を信  
て僧止しをすを停む又 一寺像并法也等並遷和國全光明寺以上  
教孝四天王寺といひり 一寺像并法也等並遷和國全光明寺以上  
文徳天皇御仁壽二年二月壬寅古寧府日記して四王院日し  
て大般若經を撰しりて之を奉りて是夜夢を撰りて代  
実瑞、皇親八年二月十四日市御友りて奉りて此後國阿鞍  
大正悲願を撰りて之を奉りて古寧府司律山四王院にて  
全別般若經之を卷般若心經之を卷を撰讀せし先く述し  
事ありて但坤山、四王院といひり四王院ハ大城の山小、四王  
院と三代實錄に云くハ坤山と四王院と古寧の事りて古寧ハ  
大城山を城とし稱し坤山四王院と書しりて古寧ハ四王  
院と信指すに違はりて云然しりて古寧ハ四王院と云



射延くもたらふといひいへしきなりけり一葉のしほの付くは  
よしく形澤きしとや今に礎石も小海に四王院と清頂  
くくつる形も昔をまじり思ふも形之可くぬき又も  
城址のわが町中より四五寺の麓ありしとて礎石も  
其の礎くつるるといふ所のやうにして今にわたりしとて  
其との付も焼くつるつるつるといふ上は形も其村八並長者  
の宅址も焼くつるつるつるといふ形も焼くつるつるといふ  
てわたりし形も焼くつるつるつるといふ形も焼くつるつるといふ  
つるつるといふ形も焼くつるつるつるといふ形も焼くつるつるといふ  
つるつるといふ形も焼くつるつるつるといふ形も焼くつるつるといふ

むねは、幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し

原山

石路川のわたり山をいへしとて其の形も焼くつるつるといふ  
幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し  
初寺跡といふ所より四五院廢澤の付山寺も又廢なり  
昔も左邊の形も又とて幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し  
の付山寺の形も又とて幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し  
は、幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し  
其を左に東八坊といふ  
坂本村  
四五寺も又とて幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し  
左本村とも云坂本の上より石垣あり四五寺の門の址あり石垣の  
高サ之間長七十八間今も残りし跡形も其の門の礎あり大  
なる雁の形あり山形も圓形村といふ所も昔に寺といふ四五寺  
の形も其の形ありしとて幸ひのりて有る也しむねは、幸ひのりて有る也し



正を以て楡皮とせしむ

國分寺址

あふ村にわづ溝堂古蹟の跡とくちなる礎石あり付  
の付にわづ廢院ありしや華原の遺蹟とて林ありしと云  
き葉作堂ありしと云ふも礎石あり 聖徳太子天皇九年  
丁丑年 勅して日本に宗廟を列す國分寺を造る  
文徳天皇仁壽二年八月壬午府内宮内山に寺を造りて大般若  
經を寫し給ふと云ふ事有之在式部省の國分寺料三  
千二百九十二束とあり 聖徳太子二十  
六十二年 年久傳を以て養ひしと料  
かゝのち後世にわづ堂大舟無頼の思ふ年製を以て礎石を深  
く牙を以て寺を造りしと云ふ事連想の往來と云ふ事ありし  
跡傳せしと云ふ今福列の山に寺廢院せしと云ふ事ありし  
ふに傳せしと云ふ 今葉作堂を以て寺と云ふ事ありしと云ふ事ありし  
と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありし

形を以て國分といふ國分  
大く云ふといふことと云

國分尼寺の址

小方村にわづ小方寺の址と云ふ西の第一町ありしと云ふ址ありし  
礎石ありしと云ふ事ありし 聖徳太子天皇九年  
國分尼寺を造りしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありし

一々

楡岳山宗福寺址

此寺址楡岳山の西にわづ川宗府村の傍にありし思川を以て  
わづ首世ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありし  
山と云ふ 宗福寺の事那所教の  
事ありしと云ふ事ありし 四條院仁治元年福慧といふ信初て  
此寺を立し後深慈大徳寺作南浦山和尙を信じて此寺の開山  
と云ふ南浦山煙山堂小願法ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありし  
と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありし



美濃松原の崇福寺を移す所なり又法堂佛殿等の礎  
の石を移す所なり八十八の大字の西あり向く瑞雲  
をすべし瑞雲寺なり

靈祐院 長松軒 蓮春軒 雲松軒 崇王軒 雲岩庵

雲花庵 慈風軒 胎禪寺 正洞庵 昆蘆庵 正陽庵

心言庵 大中庵 大聖庵 又東軒 三友軒 白陽軒

正信庵 大波軒 耕閑軒 正名庵

又八重行の龍深岩 地身今 白蓮亭 圓通閣 耳露井

霞陰藤 瑞雲庵 白蓮池 鈴屋 長松庵 梅の宿

是より此地の石を移す所なり又法堂佛殿等の礎  
の石を移す所なり八十八の大字の西あり向く瑞雲  
をすべし瑞雲寺なり



